見本

実践

心ふれあう子どもと表現

松家まきこ・鈴木範之　編

みらい

見本

はじめに

表現とは、どのようなものでしょうか。

幼稚園教諭をしていた頃のある日、私は、子どもたちと一緒にチョウになりきり、両手を広げて羽ばたいていました。ところが、ふとみると、部屋の片隅で一人、たかちゃんがじっとうずくまっているのです。「どうしたの？ たかちゃんも一緒に飛ぼうよ」そう言いかけて近づいてみると…、たかちゃんはダンボール箱でつくった切り株の傍らにしゃがみこみ、黄色のクレヨンで描いた蜜を舐る仕草をしていました。「そうか、たかちゃんはカブトムシなのね。美味しい蜜が見つかってよかったね」と声をかけると、たかちゃんは満足そうな表情でゆっくりと立ち上がり、両手を震わせてみんなのもとへと飛んでいったのです。その手の向きや揺らし具合は、チョウではなく、日々、たかちゃんがじっくりと観察をしてきたカブトムシの姿そのものでした。

たかちゃんは、入園してからずっと一人で園庭の虫を追いかけている子どもでした。私がそっと本棚に図鑑を置いておくと、すぐに気がつき、目を輝かせて何度も眺めたり、夏にお父さんと一緒につかまえたカブトムシを画用紙いっぱいに描いたりする体験を重ねてきました。一人の世界を存分に楽しみ、そのありのままの表現や世界を受け止めてもらう体験を通して、ついに、クラスの仲間と一緒の場でも表現を楽しむようになったのです。その凛々しく繊細な表現は、ほかの子どもの心も魅了しました。その後、たかちゃんは、ダンボールと不織布でカブトムシの羽根をつくり、チョウの友だちと一緒に基地をつくって遊びました。

このように、表現とは、子ども自身の内面から溢れ出るものなのです。日々の生活や遊びの中で心を動かし、体験の中で蓄えられたイメージや思いから生み出されるものなのです。それは、時に素朴に、時にダイナミックに響き合い、受け止めてくれる存在や環境を通して、さらに豊かに広がっていきます。

表現とは、「内部にあるものを外部に表すこと」で、「人間の本能的行為」[1)]であると言われています。つまり、表現とは生きる姿そのものであり、日々絶えず生み出されていくものと言えます。そして、育ちゆく子どもの表現はその時々にしか表すことのできないかけがえのない姿でもあります。保育者はそのかけがえのない姿を受容し、その内に秘めた輝きを丁寧に見取り、環境やかかわりを通して応答していくことが大切です。

「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」には、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）が明記されています。これは、幼児期が小学校以降の下請け期ではなく、むしろ、生涯の基盤となる力を育む大切な時期であることを改めて示すものです。そして、10の姿の一つとして捉えられた「感性と表現」の具体像には、「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現

見本

したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲をもつようになる」と記してあります。つまり、「自分なりの表現」と「過程」を大切にすることが表現する「喜び」と「意欲」につながるのです。「表現」は「感性と表現の領域」であり、その主旨は「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにすること」です。子ども一人一人が幼児期にのびのびと表現することを楽しみ、受け止め合い、分かち合う喜びを知ることは、生涯にわたって自己をいきいきと表現し、人とともに生きる力を養うことにつながります。

文部科学省の「教育課程コアカリキュラム」のモデルカリキュラムには、「幼児と表現」について「当該科目では、領域「表現」の指導に関する、幼児の表現の姿やその発達及びそれを促す要因、幼児の感性や創造性を豊かにする様々な表現遊びや環境の構成などの専門的事項についての知識・技能、表現力を身に付ける。」と記されています。また、新しいカリキュラムにおける授業の目標には大きく分けて二つあり、一つは「幼児の表現の姿やその発達を理解する」こと、もう一つは（保育者側の）「幼児の表現を支えるための感性を豊かにする」ことが掲げられています。加えて、保育者養成校の授業において身につけたい内容の具体例には、新しい指針に沿った子どもの具体的な姿への理解や様々な表現に関する基礎的知識・技能の習得、そして、それらを活かした具体的な保育を構想する力の育成が求められています。

そして、各養成校では、これまで音楽表現・身体表現・造形表現としてそれぞれの授業を展開していた内容を見直し、より総合的かつ幅広く捉えた表現への学びと保育現場における実践をイメージしたプロセスの学びが体験できる内容へと再構築する必要が出てきています。

本書は、保育というかけがえのない営みの中で、表現が生み出され・育まれていくプロセスに寄り添い、子どもたちとともに、日常を楽しく豊かに創造していくための基礎知識と保育者の役割について、実践例（題材・環境づくり・援助）を通して学んでいただけるように以下のポイントをふまえ構成しました。

1. 表現とはいったい何なのか、その中身と魅力を知る。
2. 子どもの表現を捉える視点と感性を養う。
3. 保育者としての基礎的知識・技術を身につけ表現性を豊かにする。
4. 保育者の役割を理解し、子どもの表現を引き出すための環境づくりや援助方法を学ぶ。

本書は、音楽表現・身体表現・造形表現の研究者及び実践者、保育者養成校の教員、現役の保育者の方々など、幅広い方々に執筆に携わっていただきました。執筆者それぞれの専門性と研究成果から捉えた表現の魅力と実践例を惜しみなく記していた

見本

だき、これから保育者を目指す人たちへ伝えたい内容が詰まっています。本書の内容を通して、総合的かつ幅広い表現の魅力を知っていただき、より多くの方に子どもたちとともに表現を楽しみ、豊かな日常をつくり出していっていただければ幸いです。

2020年12月　編者代表　松家まきこ

1）中野友三「幼児造形表現の見方、育て方―大人のかかわり方の観点から―」比治山大学短期大学部紀要（37）2002年　pp.17-26

目次

見本

はじめに

Ⅰ　表現とは

第1章　領域「表現」とは　―表出から表現へ―　12

1 ― 表現とは　12
2 ― 表現の過程　14
3 ― 母親と乳児の関係性からみる表現と援助　15
4 ― 子どもの表現を育むための援助または保育者の役割　15
演習1　16

第2章　領域「表現」のねらいと内容および評価　18

1 ― なぜ「表現」か　18
2 ― 領域「表現」設立の経緯　19
3 ― 領域「表現」のねらいと内容　20
1 乳児の保育内容　20
2 1歳以上3歳未満児の保育内容　22
3 3歳以上児の保育内容　25
4 ―「表現」にかかわる保育実践の評価　27
演習2　29

Ⅱ　表現のバリエーション

第3章　音楽表現　32

1 ― 聴くことを中心とした音さがし・音づくり　33
1 園の音環境について　33
2 音を聴くことを中心とした音さがし・音づくり　34
実践 サウンドスケープ　34
実践 場所当てゲーム　35
実践 音さがし　36
実践 紙コップクイーカづくり　37
実践 フォークの音を聴いてみよう　38
実践 糸電話をつくろう　39
3 保育の中の「あたりまえ」を疑ってみよう　40
演習3　41
2 ― 会話としての手遊び歌　42
1 手遊び歌で育む共生感覚　42
2 音楽的な能力の基礎を培う　43

見本

3 「幼児期のおわりまでに育ってほしい姿」につなげて 45
4 手遊び歌の創作 50
演習4 51

3 ― いろいろなうたあそびから表現遊びへ 53
1 わらべうた 53
実践 ちゃちゃつぼ 54
実践 なべなべそこぬけ 55
実践 あんたがたどこさ 56
2 手あそび・指あそび 58
実践 ずっとあいこ 59
実践 やおやのおみせ 60
実践 かもつれっしゃ 61
演習5 62

4 ― 保幼小接続という視点からみた“歌うことの魅力”と指導の在り方について 63
1 幼稚園教育要領における「表現」 63
2 小学校学習指導要領における「表現」 64
3 小学校の歌唱指導で教師が心がけていること 64
演習6 65

第4章 身体表現 68

1 ― イメージを広げよう！ パントマイムの魅力 69
1 パントマイム遊び ―からだっておもしろい― 69
実践 まねっこどうぞ！ 69
実践 ロボット動かし 71
2 イメージで遊ぼう ―ないものがあるように見えるおもしろさ― 71
実践 いろんな壁をやってみよう！ 72
実践 なげて＆わたして＆キャッチ！ 73
3 絵本の世界からイメージを膨らませよう 74
実践 だるまさんの動きをまねっこしよう 74
実践 かぶと引っ張る人になってみよう 75
演習7 75

2 ― からだあそび ―全身を使って表現を楽しもう― 77
実践 歌から広がる表現遊び「どうぶつが『どんぐりころころ』をうたいました！」 77
実践 ワニさんのおくち 79
実践 なんでもたんてい事務所 ―戸外バージョン― 80
実践 でんきやさん鬼ごっこ 82
演習8 83

3 ― 全身で表現を楽しもう 85
実践 チューリップの花が咲くまで 85
実践 友だちと一緒に表現を楽しもう ―2人組― 90
実践 友だちと一緒に表現を楽しもう ―集団― 91
演習9 92

4 ― 表現を引き出すタオルあそび 94
実践 サンドイッチをつくろう ―畳んで楽しもう― 94
実践 なりきってあそぼう 95

見本

実践　パペットをつくって劇をしましょう　97
演習10　99

第5章　造形表現　100

1 ― 素材との出会い　―素材の特性を活かした表現技法を学ぼう―　101
1 パスとクレヨン　101
2 絵の具　103
3 紙　105
4 粘土　107
5 自然物　108
6 その他　109
実践　紙コップでつくる「紙コップシアター」　110
演習11　111

2 ― ダイナミックな造形表現を楽しもう　112
実践　色と形の抽象的な壁面制作　112
実践　カラービニール袋で巨大バルーンをつくろう　116
実践　大型ダンボールを用いたあそびの基地づくり　118
演習12　120

3 ― 児童文化財のバリエーションと活用　121
1 児童文化財を活用する際に必要なこと　121
2 児童文化財の種類とその活用のしかた　122
1 絵本　123　2 大型絵本　124　3 紙芝居　124
4 大型紙芝居　125　5 ペープサート　126　6 パネルシアター　127
7 ストーリーテリング・素話　129
3 児童文化財をつくってみよう　129
実践　「折り込み型絵芝居」『おおきなかぶ』をつくりましょう　133
演習13　133

4 ― 表現の広がり・衣装づくり　134
1 子どもたちの表現活動における衣装の役割　134
2 衣装づくりで大切なポイント　135
3 衣装づくりの素材と道具　136
実践　衣装をつくってみよう　138
4 アイデアをメモしよう！　141
演習14　141

第6章　保育の構想にむけて　142

1 ― 指導案のつくり方　142
1 指導案について　142
2 指導案の書き方　143

2 ― 具体的な指導案　145
指導案例1　手づくり楽器の演奏会　146
指導案例2　「ぐるぐるへび」づくり　148
指導案例3　だんごむしになって遊ぼう　150

見本

Ⅲ　総合的な表現活動へ

1 ― 発表会における総合的な表現活動　154
- 1 かかわりながら生まれる表現　154
- 2 物語づくりの中から生まれる表現　154
- 3 大道具、小道具、衣装の必要性　155
- 4 制作のためのデザイン画　156
- 5 制作時のポイント　157

演習15　160

2 ― 様々な表現遊びのアイデア　161
- 1 音と動きの遊びのアイデア　161
  - 実践 ラインダンス　161
- 2 笑顔を引き出す遊びのアイデア　162
  - 実践 わがままなカメラマン　162
- 3 絵本を使った遊びのアイデア　164
  - 実践 自分の中だけで聞こえる「音」を楽しもう　164
  - 実践 いろんな声色で読んで楽しもう　165
  - 実践 リズミカルに読んで楽しもう　165
  - 実践 かたちを楽しもう　166

演習16　166

3 ― 伝統芸能　167
- 1 伝統芸能を取り入れる意義　167
- 2 地域の伝統芸能を継承する　168
- 3 総合的な表現活動への広がり　169
- 4 伝統芸能の伝承と創造　170

演習17　170

おわりに　―保育者に求められる専門性と越境性―　171
参考文献　174

Column

1　表現を生み出す環境づくり　17
2　保育者のかかわりの重要性　30
3　カクテルパーティー効果　41
4　環境音の音楽　52
5　保育現場における子どもたちの歌の選び方　66
6　体験をもとにしたイメージの積み重ね　76
　ノンバーバルコミュニケーション　76
　パントマイムで気づいた保育者の役割　76
7　子どもたちの自由な表現を引き出すために大切なことは？　84
8　保育者と子どもの信頼関係　93
9　まねっこが子どもを成長させる！　99
10　子ども歌の作家の願い　152

見本

第　章

1 領域「表現」とは　―表出から表現へ―（乳幼児の表現の特性）

子どもはよく何かになりきって遊んだりします。想像上の怪獣と戦う男の子や、おままごとでお母さん役になりきる女の子などをイメージするとわかりやすいと思います。彼ら、彼女らは、イメージの世界で自らが憧れている人やキャラクターを自分なりに演じているのです。つまり自らのイメージを「表現」しているのです。

「表現」とは何でしょうか。子どもの表現の成長を支えていくために、私たちに何ができるのでしょうか。ここでは、乳幼児の表現の特性とその援助の在り方について考えてみましょう。

「表現する」という意味の英語は「express」です。分解すると「ex（外へ）」「press（押す）」となります。文字どおり、「外へ押し出すこと」あるいは「外へ押し出されたもの」が表現です。何を押し出すのでしょうか。広辞苑には、「心的状態・過程または性格・志向・意味など総じて内面的・精神的・主体的なものを、外面的・感性的形象として表わすこと。また、この客観的・感性的形象そのもの、すなわち表情、身振り・動作・言語・作品など」とあります。「内面的・精神的・主体的なもの」とは、思考やイメージなど、まだ心の内側にあって外に現れ出ていない状態を指します。これを「表象」といいます。私たちはこの表象を誰かに伝えようとするとき、どうしたらうまく伝わるかを考え、その表現方法や素材を選択し、外に表し出すことで相手に伝えます。

例として「ジェスチャーゲーム」で考えてみましょう。お題が書かれた紙を見て、それを他者に伝えるとき、どうやったらうまく伝わるかを考えます。ジェスチャーゲームですから、言葉は使えません。身体の動き、表情などで伝えます。例えば、お題が「タコ」であれば、口をとがらせるかもしれません。手足や全身をくねくねさせてタコの動きを表現するかもしれません。それはジェスチャーする人が頭の中で想像したイメージに過ぎませんが、相手がわかるように伝えるという意識、つまり伝達意図が内在します。伝達意図のあるアウトプット、これが「表現」です。

見本

では乳児の場合はどうでしょうか。赤ちゃんは言葉が話せません。そのため、何らかの欲求を訴える際には「泣く」ことで表します。声を出したり、表情を変えたり、手足をバタつかせたりして何かを訴えます。それは赤ちゃん自身が感じている何らかの欲求を表しているに過ぎません。これを「表出」と言います。お腹が空いたのかもしれません。どこか痛いのかもしれません。言葉にできませんので、泣きます。意図的というよりは、衝動的です。これが「表出」の一例です。

「表現」は他者への伝達意図が内在しており、意図的、客観的、社会的な行動と言えます。「表出」は他者への伝達意図がない衝動的、主観的、個人的な行動を指します。「表し・現し＝表現」、「表れ・現れ＝表出」と整理することもできます。また、「表現」は他者との関係の中で成立するものであり、「表出」は自己完結しています。まとめると、表出と表現の関係は以下のようになります。

表出	表れ・現れ	伝達意図なし	自己のみで成立	衝動的	主観的	個人的
表現	表し・現し	伝達意図あり	他者との関係で成立	意図的	客観的	社会的

では、「表出」はどのように「表現」へと変容するのでしょうか。乳児と母親の関係がそれを教えてくれます。

先ほど例に挙げた赤ちゃんの「泣く」という行為も、母親はその子がどうして泣いているのか、経験や関係性から徐々にわかっていくようになります。「そろそろお腹空いたのかな？」「オムツを取り替えてほしいのかな？」――日々の愛着関係や赤ちゃんとのかかわりの積み重ねにより母親自身の学習が強化されると、どのようなタイミングで泣いているのか、泣くきっかけは何だったのかなどから、その子がどうして泣いているのか母親は推察できるようになります。また、赤ちゃん（子ども）も【不快→表出→受容→解決（快）】の循環を繰り返しすることで、安心して表出し、表現してよいことを学び取っていきます。つまり、「表出」を受け止める側が理解し、受容すること。これが表現の成長を支える上でとても大切になります。子どもの表現の成長は、一方的に表現することだけで成立するものではなく、表現と受容の往還によって成立するものであり、受け止める側の反応や理解が不可欠なのです。「表出」も、受け止める側が理解と反応を示すことで、子どもは「わかってくれた」という安心感を得ると同時に、「こういうときはこうすればいいんだな」という学びの経験を強化していきます。そうした試行錯誤の繰り返しによって、「表出」は伝達意図をもった「表現」へと変容していくのです。これが表現の成長です。

見本

していくということです。一見、拙く思えるような素朴な表現であっても、その子が表現しようとする意欲を保育者は理解し、受け止めてあげたいものです。

ボウルビィ（Bowlby, J.）は養育者と乳児との間に成立する情緒的な絆を「アタッチメント（attachment）」と提唱しました。愛着関係が形成されることによって、自らの行動で環境を変化させることができるという有能感を高められるほか、養育者とのやりとりから感受性が育まれることがわかっています。これは発達心理学の領域において「一者の情動の崩れを二者の関係性によって調整する仕組み」であるとされています[2)]。

表現の成長を支える上で大切なことは、保育者と子どもの間でなされる表現と受容の往還、表現のキャッチボールです。保育者は子どもの表現に対し、否定をせず、まずは受け止め、共感すること。子どもに安心感を与え、表現しようとする意欲や自己肯定感を育むよう心がけることが大切です。

子ども一人一人の表現しようとする意欲を受け止め、遊びや生活の中で様々な表現を楽しめるようにしましょう

演習 1

1. 身近な自然や生活の中で、心を動かした出来事を紹介し合いましょう。
   また、なぜ心が動いたのかについて話し合ってみましょう。
2.「こんにちは」と挨拶するとき、対象によってどのような言い方になるでしょうか。
   声の高さの変化、速度の変化などに注目して考えてみましょう。
   ①赤ちゃん　②友だち　③先生

引用文献

1）　小島律子・澤田篤子編『音楽による表現の教育―継承から創造へ―』晃洋書房　1998 年　p.5
2）　日本赤ちゃん学会監修　小西行郎・志村洋子・今川恭子・坂井康子編『乳幼児の音楽表現』中央法規　2016 年　p.48

見本

Column 1

表現を生み出す環境づくり

保育園に就職して３年目の卒業生が、５歳児クラスの担任になった報告に来ました。年長の担任はやりがいとともに責任も大きいようです。「忙しいでしょう」と問うと、「そうなんです。忙しくて保育できないんです」との言葉が返ってきました。思わず「どういうこと？」と聞き返しました。その園では英語、体操、リトミック、茶道…と毎日何かの特別教室が入っているため、担任はスケジュール通り子どもを動かすことに神経を使うのだそうです。事前に、講師の指示通りの準備もしておかなくてはいけませんし、終わったら次のクラスの邪魔にならないよう移動します。「授業」の隙間に遊ぶ時間はありますが、「○時に集合させなくては」「○○の準備をしなくては」ということばかり気になり、じっくり子どもに向き合う余裕がないというのです。

これでは子どもの主体的な遊びはもちろん、表現も育ちません。遊びの「三間」をご存知でしょうか。「時間」「空間」「仲間」のことです。保育において遊びが重要であることは常識ですが、「30 分時間があるから遊びなさい」と言われて遊べるものではありません。うろうろまわりを探索したり、面白そうなものに触れたり、友だちがしていることを見たり…など、目的の定まらない時間こそが自分のしたいことを見つけるのに必要です。つまり、心の自由な時間や空間が大切なのです。友だちともすぐ仲良く遊べるわけではなく、真似したり仲間外れにされたりけんかをしたりという経験を通して対等な仲間として遊べるようになるのです。英語や体操教室が子どもに無理をさせない楽しい活動であったとしても、指導者の「ねらい」に沿った参加が求められており、子どもは自分の気持ちを自由に出せません。

また、表現には「心が動く」体験が必要です。豊かな表現は感性とともに育まれます。領域「表現」の「内容の取扱い」に、「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」と書かれています。自然は感性を育んでくれる素晴らしい環境です。大人の目にはありふれた草花や虫などでも、子どもはその美しさや不思議さに魅せられてじっと見つめたり触れたりします。その姿を見守り、思いに共感できる保育者の存在が重要です。子どもの思いは親しい大人に受け止められることによって表現になるのですから。

そして、子どもが心を動かされたことを絵や歌などで表現できる物（物的環境）も必要です。子どもの表現意欲を引き出す魅力的な素材や道具が整えられたアトリエや様々な楽器の音を出したり CD などで音楽を聴いたりできる部屋があると子どもは自分なりに表現することを楽しむようになります。

もちろん専門家による特別教室や保育者が主導する表現活動が子どもの興味を広げ、自発的な表現活動に結びつくこともあるでしょう。しかし、表現を育む基本は、子どもが自由にゆったりと感性を育む環境を整えることです。